日本研究に関する専門書読解への誘い
～中級段階での授業実践の試行例とその課題～

アクラス研修会（12月）
2014年12月10日（水）18：30～20：30
於：アクラス日本語教育研究所
砂川有里子（筑波大学）
砂川裕一（群馬大学）

****

配付資料：

＊　「日本語学習者のための日本研究シリーズ／Japan Studies for Japanese Learners＝JS for JL」（くろしお出版　2014～）
　第一回配本　１．高橋 武智（Takahashi Taketomo）『日本思想におけるユートピア』2014/9
　　・表紙、・目次、・はじめに、・第１章、・著者紹介、・奥付

＊　「学術論文の基本形メモ」

****

１．話題提供の趣旨

＊　つい最近出版された「日本研究シリーズ」（くろしお出版）の第１回配本の高橋武智著、平野共余子著の２冊のうち主として高橋さんの本の一部を材料にして、本格的な「専門書を読む作業」への準備段階としてどのような「読解の授業」が考えられるか、具体的なイメージをつかんでもらえるように工夫しながら、授業実践例をワークショップ的にやってみたいと考えています。日本語教育の観点からも専門教育の観点からも参考にしてもらえそうなものにしたいと思います。（「アクラス研修会のお知らせ（12月）」より）

１）「はじめに」によるシリーズの狙いについて
２）「調べながら／考えながら／繰り返し／読む」＝専門読解への入門（予備訓練）のサンプル紹介
３）「読む」作業の後の「書く」作業へ（インプットからアウトプットへ）の可能性について

****

２．ポイント１：「奥付」「著者紹介」による書誌情報の確認／著者の確認と理解
　＝「誰」が書いた「何という本」を「読む」のか、
　　についての確認と自覚を求める（デザインや手触りも含めて）
１）著作の表題、２）著者名、３）出版社名（シリーズ名との区別）、４）出版年（特に初出年）
５）著者紹介、著作の時代背景の紹介など

３．ポイント２：「目次」による著作の全体像・構成の確認

＝「一冊の書物」としての「組立と流れ＝物語性」についての予測と視界の拡充を促し、
序論部分から結論部分へいたる一冊の書物（論文）としての「構造」に目を向けさせること

４．ポイント３：「考えながら」「調べながら」「繰り返し」「読む」体験：一つの事例

＝「未知の専門的領域」に「文章表現を媒介」にして踏み込んで行く作業

＝新たな知識を吸収し、馴染みのない考え方についての理解を深めながら、専門的に上昇して行く作業

＝「専門書を読むという作業」 ☜⬅☜⬅☜⬅ 「難しい」のは当たり前

⬇⬇

＜日本語教師＝非専門家＞も一緒に読んでみよう！

☞ 非専門家でも／日本語があまりできなくても、読めるように工夫された専門書

授業の手順（サンプルとして）：

1）予習内容の活性化のためにその場で各自で再読＝「読書の時間」

2）学習者の水準での内容確認のためのフリー・トーキング＝「自由な話し合いの時間」

＊ 教員は極力介入しない＝学習者による「自力 and/or 相互協力による文章表現の理解」を重視

3）教員による解釈やコメントの時間＝「ミニ講義の時間」

＊ “ 正しい解釈や理解 ”を与えるのではなく“一つの読み方”であることを強調する

＊ 学習者それぞれの理解や解釈との比較検討を促す

＊ 「疑問や反論や戸惑いなど＝批判の芽」を重視し記憶（記録）することを求める

（参考）５．ポイント４：アウトプットへ（グループ and/or 個人の発言や発表やミニ論文執筆などへ）

・読む作業＝学術文献の構造（のバリエーション）の理解へ

・書く作業＝学術文献の構造に即して主張しようとする論点の構造化へ＝論文として構想する訓練

＊ 章ごと（部分ごと）に担当者（担当グループ）による「レジュメ発表」へ

＊ 「要約文」の執筆へ

＊ 「書評論文」の執筆へ

＊ 学術的なスタイルでのミニ論文執筆のための「着想発表」へ

＊ 学術的なスタイルでの「ミニ論文」執筆へ

６．まとめ：専門書を本格的に「読む」こと（＝書くこと）への誘いとして

☞ 「誘うことを目的とした専門書」（＝「日本研究シリーズ」）という編集姿勢

****

７．質疑／補足

****